

## II 組織の取組

## 1 過年度の取組

本校では、平成 27 年度土曜授業推進事業の指定を受け、土曜日を年間 10 日開校日とし、教育活動を実施した。本校の伝統として、体育祭や文化祭をはじめとした学校行事への地域住民の参加率が高い。また、地方祭等の地域諸行事においても、本校の生徒がその担い手として参加するなど、地域との関わりが非常に強い。そこで、その計画段階において、教科指導だけでなく、地域活動を取り入れることにした。それまで、本校においては担当課や部活動単位において、それぞれ地域活動に取り組んでおり、学校全体として取り組むような体系的なシステムが確立されていなかった。そのため、週に 1 時間の「総合的な学習の時間」に、学校全体として地域連携活動に取り組むよう、「総合的な学習の時間」に取り組む地域活性化事業を「三崎おこし」と名付け、カリキュラムの見直しを行った。1 年生「地域理解学習」、2 年生「地域活性化プランの作成」、3 年生「地域活性化プランの実践」とし、「総合的な学習の時間」に加え、開校土曜日の 2 時間を使って年次進行で三崎おこしに取り組むこととした。また、研究グループごとに教員を配置することで、生徒・教職員ともに「学校全体で地域協働活動に取り組む」という意識が醸成された。

平成 28 年度には「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」、平成 29 年度には「コミュニティースクール推進校」、平成 30 年度には「地域を担う心豊かな高校生育成事業地域活性化プロジェクト」の指定を愛媛県教育委員会より受け、地域協働活動の研究に取り組んできた。4 年間の取組を通して、本校卒業生や地域住民、各種団体と連携して活動する機会が増加し、多くの人に本校の取組を知ってもらうとともに、地域との協働による活動への協力体制を確立することができている。

さらに、平成 28 年度より本校は、「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中核事業として設立された「伊方町移住・定住促進協議会」の構成メンバーとして連携活動を行っている。具体的には、同協議会の会議への参加に加え、同事業の「次世代人材育成事業」として外部講師を招き、「伊方町移住・定住促進協議会」に共催、伊方町、伊方町教育委員会に後援していただいて、学校という枠を越えた町全体でのシンポジウムを開催したり、東京で行われた「特産品フェア」に本校生が帯同し、町の PR を行ったりするなど、地域を担う学校として伊方町と連携して多くの活動に参加してきた。

上記のように、本校が本事業採択前より取り組んできた地域との協働活動において積み上げてきた経験や、そこから得られた学びは、生徒、教職員と校内全体のそれぞれの立場の間で共有されたと同時に、地域や外部人材との連携を生み出してきた。

## 2 コンソーシアム

### (1) 概要

本事業の実施においては、これまで、それぞれの場面での地域協働活動で育まれた学校と地域の結び付きを軸に、より組織的、継続的な取組を行っていくための組織である「コンソーシアム」を編成することにした。コンソーシアムは地域の人を中心に組織し、様々な立場、視点からの指導・助言を行ってもらうことで、本事業の効果的な実施を行っていくとともに、コンソーシアムメンバー同士の連携を深めることも目的とした。初年度は、8 団体に参加してもらっていたが、本年度は 12 団体に参加してもらっており、より多くの人に本校の活動に関わってもらえることができている。

本年度の活動内容としては、実施事業への指導・助言、ブームラン人材育成のための総合的な取組の在り方、地域資源・地域人材のさらなる活用・連携方法についての助言等である。大学や地元 N P O 法人、行政等それぞれの視点から多角的な意見を出してもらうことで、校内の委員会だけでは気が付かない意見や、新

たな発想からの助言等をもらうことができた。

本年度は、7月に第1回コンソーシアムを、3月に第2回コンソーシアムを開催した。本年度で本事業は終了するが、来年度以降も継続してコンソーシアム活動を行っていく予定である、

コンソーシアム参加団体一覧（順不同、敬称略）

機関名	機関の代表者名
愛媛大学	学 長 仁科 弘重
専修大学	学 長 佐々木 重人
NPO法人佐田岬ツーリズム協会	理事長 宇都宮 圭
NPO法人さだみさき夢希会	代 表 加藤 智明
NPO法人二名津わが家亭	代 表 増田 克仁
佐田岬みつけ隊	隊 長 道元 平
伊方町	町 長 高門 清彦
一般社団法人E．Cオーシャンズ	代 表 岩田 功次
MIGACT	代 表 濱田 規史
愛媛県教育委員会高校教育課	課 長 島瀬 省吾
公営塾未咲輝塾	塾 長 辻 良隆
愛媛県立三崎高等学校	校 長 和田 俊之

(2) 第1回コンソーシアム

ア 期日 令和3年7月13日（火）

イ 参加者

笠松 浩樹氏（愛媛大学）、大崎 恒次氏（専修大学）、  
 宇都宮 圭氏（佐田岬ツーリズム協会）、田村 義孝氏（さだみさき夢希会）、  
 増田 克仁氏（二名津わが家亭）、黒川 信義氏（佐田岬みつけ隊）、  
 岩田 功次氏（E．Cオーシャンズ）、宮本 廉氏（伊方町）、  
 三好 要氏（伊方町）、川本 昌宏主幹（高校教育課）、  
 近藤 啓司指導主事（高校教育課）、辻 良隆地域協働学習実施支援員、  
 和田 俊之校長、川野 光正教頭、津田 一幸地域協働課長、  
 河野 雄太地域協働課員、成木 亜衣地域協働課員

ウ 開会行事

（校長挨拶）

お忙しい中、お越しいただきありがとうございます。文部科学省の指定、最終年となりました。2年間、「総合的な探究の時間」と未咲輝学を通して行ってきた成果をまとめていきたい。生徒の自主性、協働性、創造性が養われたか、地域からどのように評価されているかを本日確認させていただきたい。卒業生がブーメラン人材として育てているかも含め、今後の本校の取組について、御指導・御助言いただきたい。

エ 本事業の概要説明と生徒活動報告

【概要説明】

（津田教諭）

昨年度からの変更点として、大崎先生、黒川さん、岩田さん、濱田さんの4名に新たに加わっていただいた。これからもぜひ御協力願いたい。

今年度事業計画は資料のとおり。新型コロナウイルス感染症予防のため

対面での活動が難しく、オンラインでの活動も取り入れていくことになることが予想される。昨年度、岩田さんと海ゴミのシンポジウムに参加した。それを受けて大分県からも参加依頼があった。昨年度の活動内容は、せんたん新聞参照のこと。

【せんたん部の卒業生2名へのオンラインインタビュー】

(卒業生)

高校時代に印象的だった活動は、校外の人と触れ合ったこと、オンラインワークショップの先生役をしたことである。地域活動の後には、地域の人から「頑張ってるね。」と話しかけられた。何気ない会話ができることがうれしかった。

大学生になり、友だちと高校時代の話になった時、自分の高校生活が特殊だったことを痛感した。今は地域での活動をあまりしていない。高校生活で、イベント等の参加意欲が高まり、自主性が身に付いたと感じる。

(卒業生)

高校時代は、何事も挑戦してみてよかった。高校生活輝いていたなと思う。周りにある資源でやっていた。せんたん劇場は自分にとって、とても大切なイベントだった。

大学では、フリーペーパーを作るサークルに入って、地域の中に溶け込む活動をしている。地域で「裂織り」も行った。いろいろな活動を地域でさせていただいて感謝している。夢を見付けられたのも、地域活動のおかげだと思っている。

オ 研究協議

- ・地域との協働活動をさらに進めていくための情報発信の方法について
- ・生徒の主体的な活動と教職員の関わり方について

カ 質疑応答

(津田教諭)

地域活動を通して、生徒たちにコミュニケーション能力、問題解決能力が身に付いたと感じる。南予地区への就職率は、50%以上である。今後、大学進学者がどれだけ地元に戻ってくるか。町外出身者であっても、将来伊方町とのつながりを持ってくれるかに期待したい。

机上にあるマーマレード、ヤマモモジャムは生徒が作ったものである。伊方町の特産品として商品開発を進めている。

(田村氏)

文部科学省の指定校として最後の1年、素晴らしい活動を期待している。先生たちのマンパワーが素晴らしいと思う。今いる先生たちが異動となった場合、システムとしてどのように残していくか。

(和田校長)

未咲輝学、総合をメインに教員全体で取り組んでいる。次のリーダーシップをとる教員もいる。

(川野教頭)

先生方は熱心に指導してくれている。その一方、放課後、休日の負担が少ないわけではない。生徒が自走することができるように、休日にもっと地域の方に協力していただきたい。つながりを大切にしていきたい。御協力願いたい。

(津田教諭)

地域協働課として動いている。教員が個別に対応している休日の活動については、実施方法など今後の検討が必要であると考えている。今までのノウハウはデータで残しているので引継ぎはできる。大学との連携も今まで以上に行っていきたい。

(笠松氏)

ブーメラン人材ということだが、地域も含めて、卒業後の受け入れ態勢はどうなっているか聞きたい。

(宮本氏)

町として、三崎高校を残したいという思いを持って動いている。事業としては、新しく町営寮を作った。受け入れ態勢としての働き口といった面を今後整えていきたい。そのことも踏まえて、昨年度三崎高校1・2年生を対象に就職説明会を行った。

(田村氏)

魅力的な仕事が少ないというのもある。仕事を選ばなかったら、伊方町にも仕事はある。そんな状況で、新規事業者に対しての補助を町が行ってくれるとよい。

(笠松氏)

大学卒業後、地元就職するだけでなく、他地域で経験を積んで帰るという形もある。起業をサポートしたい。生徒と地域が互いに愛情を持って取り組んでいる。相乗効果でよい形だと思う。3年間ですぐできるものではないと思う。どうやって築いてきたのか聞きたい。

(津田教諭)

6年前、地域に関わる機会が少ないという意見があり、地域の方を特別講師として料理を作ったり、演奏したりするという活動を行ったことが、本校の地域との協働活動の始まりである。このことをきっかけに、「三崎高校生がいてくれたら町が元気になっていいよね」という感想を持ってもらえることを目指した。企画から一緒に参加し地域行事を盛り上げてきた。生徒と地域の方との6年の積み重ねがあったと思う。3年では確かに難しかったと思う。

(田村氏)

もともと前の木造校舎は三崎小・中学校の隣にあった。お祭りやイベントに顔を出してくれると、親近感もわいていた。

(川野教頭)

3年間では厳しい。分校化の危機もあり、補習や勉強ばかりだったのを変えてみた。面白いと感じることを行い、生徒の自己肯定感が高まった。周りからも評価してもらえ、その活動が進路にもつながった。人間としての成長も見られ、地域からも見直されている。

(笠松氏)

自分で学ぶ力が身に付いてきていると感じる。

(黒川氏)

「ブーメラン人材」を育てるということだが、実際に帰ってきているのか。他に何が必要で、何が課題なのか明確にしていきたい。都市部への一極集中が崩れつつあり、地方の住環境は少しずつ整ってきていると思う。魚やみか

んがおいしいというのは周知のことだが、他に半島で独特のものは何か。説明をきちんとできるようになってほしい。課題を探すなど、アイデアをみんなを出し合いたい。

(岩田氏)

以前から漂着ごみを拾う活動を行っていて、現在会社化についても検討している。しかし、この活動を実は子どもたちと一緒にしたくない。汚すぎて海を嫌いになってしまいそうだから。次の世代につなげていくために、地球をきれいにする活動をまた夏からやっていきたい。お願いできることがあれば、一緒にやっていきたい。

(宇都宮氏)

これまでの活動では、地域の人困っていることや三崎高校生がやりたいことをやってきた。町自体は衰退している。マンパワーが足りない。お祭りなど、地域の文化、そういった面から入るのもよいのではないか。青年団の考え方もあるが、9～10月に部活後高校生に協力してもらい、郷土芸能の唐獅子、五つ鹿の踊り手になってもらいたい。青年団側、地域全体の考えも聞いてからになるが、廃れかけの三崎秋祭りを盛り上げていけるのではないかと思う。

(宮本氏)

受け入れ側の意見も聞いていく。みんなが納得して、協働関係になるとよい。

(増田氏)

正直、もっと踏み込んでほしい。高校生がどのような活動をしているか知らない人もいる。生徒たちに困ったことがあったら、駆け込めるような場所でありたい。その橋渡しを学校が行っていけばよい。

(大崎氏)

昨年度から本学生と三崎高校で交流をしている。「教育実習で三崎高校に行きたい」というように、ゼミの学生も刺激を受けている。関係人口を広めていくところに意義があると思う。昨年度の取組の中で、商品開発班の話があり、開発したものを首都圏にどう広めていくか検討した。こちらにできることはプロモーションだと思った。細く長く続けていけるよう、今の課題を共有していきたい。

(川本主幹)

説明できるようにしていくことが大事。三崎高校生は大学の先生と話しても、しっかり話せる。協力体制を研究していけたらいい。御指導のほど継続してお願いしたい。

(和田校長)

これからの1年どう活動していくかを考えた時、もう一步踏み込んだ地域協働活動をしていきたいと感じた。地域の方からの言葉がうれしいというのもあったが、生徒の更なる成長のため、また御協力を願いたい。

キ 閉会行事

(校長挨拶)

熱心に御協議いただきありがたい。本日いただいた貴重なご意見は、本校で練り上げ、今後の活動に生かしていきたい。

### (3) 第2回コンソーシアム

ア 期日 令和4年3月11日（金）

イ 参加者

大崎 恒次氏（専修大学）、宇都宮 圭氏（佐田岬ツーリズム協会）、  
黒川 信義氏（佐田岬みつけ隊）、宮本 廉氏（伊方町）、  
川本 昌宏主幹（高校教育課）、近藤 啓司指導主事（高校教育課）、  
辻 良隆地域協働学習実施支援員、和田 俊之校長、川野 光正教頭、  
津田 一幸地域協働課長、河野 雄太地域協働課員、  
浅野 真也地域協働課員

ウ 開会行事

（校長挨拶）

年度末のお忙しい時期に多数の参加に感謝する。先日、本校の探究活動の発表会である「未咲輝-SENTAN-発表会」を初の完全オンラインで実施し、多くの方に見ていただくことができた。また、本年度も様々な賞を受賞することができ、本校の活動を評価していただくことができた。本事業は本年度で終わりになるが、来年度以降の取組について協議していただきたい。

エ 本事業の概要説明と卒業生現状報告

【概要説明】

（津田教諭）

本年度は、本事業指定最終年度となる。ブーメラン人材の育成をテーマの一つとして活動してきた。「総合的な探究の時間」の六つの班の探究活動に加え、個人やグループでの探究活動など様々な活動が活発に行われた。これらの活動を通じて「ディスカバー農村漁村の宝」特別賞など様々な賞を受賞することができた。また、本事業における地域協働活動を通して、南予地域や生徒の出身地での就職者の増加などの成果が表れてきている。地元への思いを育む教育の成果であると考えている。カリキュラム開発により負担が増えるなどの課題もあるが、バランスを考慮した実施方法を考えていきたい。そのためにも、計画段階でコンソーシアムとの連携をとるなどの工夫を行っていきたい。また、ブーメラン人材育成の成果確認が今後の課題となると考えている。

【卒業生活動報告】

（活動報告）

（卒業生 楠氏）

- ・小学校教員を目指している。
- ・自分を変えたくて高校に入学。せんたん部の先輩にあこがれた。
- ・コミュニケーション能力やプレゼンの力、臨機応変さなどを身に付けることができた。
- ・現在の大学がある都市の魅力発信などを行っている。
- ・学校と地域をつなぐ人材になりたい。

（卒業生 尾澤氏）

- ・「裂織り」文化の継承に特に力を入れていた。
- ・地域創生について学習中である。
- ・高校で学んだ経験を活用し、市内の市場の中にある、学生が運営している店舗で「裂織り」の活動を行っている。
- ・高校での活動を発展させたような活動を大学でも行っている。

・「裂織り」を文化として残し、地域創生につなげるビジネスをしたい。  
(質疑応答・感想)

(宇都宮氏)

大学に行き感じた三崎高校との違いは何なのか。

(楠氏)

友人と地域の話をする際に、私は地域の魅力を分かっているのでこちらからは発信できるが、逆は難しい。三崎高校で深く地域と関わっていたことを実感した。

(尾澤氏)

大学でも地域創生の活動はあるが、高校時代の方が自分のしたいことをやれていた。大学では専門性や成功が求められている。高校生の活動ならではのフットワークの軽さ、とりあえずやってみるという思い切りの良さが魅力である。

(川本主幹)

自分を持ちつつ大学でさらに成長する姿勢が素晴らしい。教育においても自分で考えられる力の育成が求められる。

#### オ 研究協議

- ・「ブーメラン人材」育成のための総合的な取組の在り方について
- ・地域資源・地域人材のさらなる活用・連携方法について

#### カ 質疑応答

(黒川氏)

「ブーメラン人材」の育成について、高校自体の魅力を高めることは前提として重要だが、郷土をブランディングするという視点で未咲輝学を行っている。その成果は見られているか。

(津田教諭)

未咲輝学の中で地域との交流を通し、三崎のことをよく知っていくことで、県外生などは自分の出身地の魅力を知りたいという思いにつながっている。1年生は佐田岬の地形などに興味を持つような取組ができている。2年生、3年生は起業について興味を持ち、地域資源を生かしたプランを考えビジネスコンテストで入賞する生徒が毎年いる。未咲輝学の成果は、確実に表れていると感じる。

(宮本氏)

高校卒業後すぐに役場などで働くような即戦力人材の育成をお願いしたい。役場でのインターンシップなども行ってほしい。

(和田校長)

人材育成をしてもその受け皿がなければならぬ。役場との連携などはぜひ行いたい。

(川野教頭)

町外出身の生徒が出身地域で就職したとしても、本校で学んだことを生かし、そこで活躍できる人材育成を行いたい。また、リモートを活用した取組も積極的に行っていきたい。

(辻氏)

文化祭での地域の人と教員での校歌合唱や郷土芸能などは、三崎高校らしい本当に素晴らしい取組である。ぜひ、今後も継続して行ってほしい。

(宇都宮氏)

三崎での「普通」が他での「特別」だということに気付いてほしい。

キ 閉会行事

(校長挨拶)

私は3度目の赴任だが、そのたびに三崎高校は変化していつている。これからどうなるのか。都会では時間という要素が重要視されている。リモート化が進む現在では、うまくオンラインでの活動を利用した「ブーメラン人材」活躍の場を考えていきたい。そのためにも、三崎が好きだという思いを育む教育を柱としたい。今年度は、コロナの影響による行事中止の中でも、視察やオンライン活動を行うことができた。これらを来年度にも生かしたい。学校の試行錯誤が地域の魅力づくりにつながる。本事業は本年度で終了となるが、本コンソーシアムを来年度以降も継続して活動していただけるようお願いして、閉会の挨拶としたい。

### 3 管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について

#### (1) 職員体制に関する支援

ア 小規模校で地域活性化活動に取り組むことを希望する優秀な教員の配置

イ 本校出身の優秀な教職員の配置や、本校勤務年数が長い経験豊富な教員の配置

#### (2) 取組内容に関する支援

ア 生徒のグローバルな視点の習得支援（未咲輝塾によるトビタテ！留学 JAPAN 応募にいたる指導）

イ 生徒のコミュニケーション能力の向上支援（県教育委員会によるえひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の参加支援）

ウ 伊方町による本校地域活性化に関する特別授業における講師謝礼、旅費の予算措置

エ 伊方町による本校地域連携事業（せんたん新聞、せんたん book 制作）印刷物制作費用全額補助

オ NPO法人佐田岬ツーリズム協会によるブイアートプロジェクト（地域資源活用プログラム）における活動支援

カ NPO法人さだみさき夢希会による「みっちゃん大福」の普及及び販売活動（特産品の開発）における活動支援

キ 愛媛大学による「アサギマダラ」の研究（地域資源活用プログラム）及び合同ダンス制作（情報発信）、エネルギー教育事業（課題解決カリキュラムの開発）における活動支援

ク 専修大学による「総合的な探究の時間」における活動支援

ケ 佐田岬みつけ隊による歴史や文化を中心とした地域研究活動（地域資源活用プログラム）における活動支援

#### (3) 成果普及のための支援

えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（1月27日、発表と意見交換）

#### (4) 運営に関する支援

##### ア 運営指導委員会の開催

年2回実施（7月13日、3月11日）

##### イ コンソーシアムの開催

年2回実施（7月13日、3月11日）

##### ウ えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（発表と意見交換）1月27日実施

#### 4 伊方町（伊方町移住・定住促進協議会）との連携について

本年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により、年度当初に予定していた「第4回せんたんミーティング」、「第2回せんたん劇場」の開催及び、外部の専門家を講師とする特別授業の実施等の連携事業が中止となってしまった。その中で、新たな取組として、本校の地域連携活動の歩みや成果、学校生活の様子などをまとめた冊子である「せんたん book」の制作に1年生が取り組んでいる。「せんたん book」は本事業の3年間も含めた、本校が地域との連携活動に取り組んできた7年間の成果をまとめた内容になる予定である。外部講師にオンラインを活用したワークショップを行ってもらいながら、3月の完成を目指して制作を進めている。また、1年間の活動の様子や三崎高校の紹介を行っている「せんたん新聞」第3号も3月の発行に向けて、せんたん部の生徒が中心となって制作に取り組んでいる。

完成したこれらの刊行物は、町内の施設や関係機関等に設置させてもらうことで、本校及び伊方町の魅力発信の一助としたい。

本校では、学校ホームページや学校 facebook を活用して学校や伊方町の情報発信を行っている。インターネットでの情報発信には、一度に多くの人に情報を届けられるという利点があるが、三崎高校のことを全く知らない人に対しては、効果的に情報を届けることができないというデメリットもある。そこで、刊行物という形として残るものを制作することで、より多くの人に情報を発信したいという生徒の思いから本企画がスタートした。オンラインとオフラインを融合させることで、三崎高校と伊方町の情報をこれまで以上に多くの人に発信していきたい。

#### 5 集落等コミュニティに特化した課題解決カリキュラムの開発

##### (1) 類型毎の趣旨に応じた取組について

地域魅力化型の趣旨を踏まえ、学校と地域が協働することで互いの強みを生かしつつ、更なる相乗効果を生むことをねらいに活動に取り組んだ。学校の強みとしては、高校生らしい柔軟な発想力を生かした活動を行っていくことや、地域の行事や伝統文化の後継者として、これらの活動に活力を与えられることである。一方、地域の強みとしては、学校内だけでは実践することのできない探究的な学習活動の場を提供できることや、多様な人との関わりを通して、コミュニケーション能力などの「生きる力」を育むことができるということである。本校は、愛媛県内で高齢化率が2番目に高い伊方町に立地しており、地域課題が生徒一人一人にとって身近なところにある「地域課題先端地域」である。しかし、それを否定的にとらえるのではなく、「最先端の学びができる地域である」と肯定的に捉えることで、生徒一人一人が明るい展望を持ちながら課題解決学習に取り

組むことができている。また、地域住民との距離が近く、本校への関心が高く期待も大きいいため、協働的で開かれた活動を行うことができている。

## (2) 学校設定科目「未咲輝学」について

系統的かつ、持続的な地域協働活動の取組を行っていくために、昨年度、学校設定科目「未咲輝学」を開講した。週に1時間、学年ごとにテーマを決めて学習活動を行い、3年間の系統的な授業を通して「ブーメラン人材」として必要な力を育成することを目標として学校設定科目を設置した。また、学校設定科目を新設することでカリキュラムを再編し、効果的な学習活動を行うとともに生徒・教職員の負担を軽減することも目的としている。

1年生は、「地域理解」をテーマに、地域の史跡・施設見学の調査・研究等や、裂織り体験、愛媛大学・四国電力と協働したエネルギー関連事業などを行った。また、本校カリキュラム開発等専門家に伊方町の歴史や文化、地理上の特色などについて理解を深めるためのカリキュラムを開発してもらい、実施した。地域の郷土館の学芸員や地元企業の人等に協力してもらい、専門的な助言をもらうことで、より深く地域理解を行うことができた。

2年生は、「地域課題の発見・解決」をテーマに活動を行った。地域課題を経済的側面から考察するために、経済産業省と内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）が提供しているRESAS（地域経済分析システム）を用いてグループごとにテーマを設定して、研究を進めた。その研究結果を「地方創生☆政策アイデアコンテスト」に応募することで、第三者による客観的評価を得て、自分たちの活動の見直しや改善を図る機会とした。その中で、2チームが地方一次審査を通過した。この結果に、生徒たちは活動のやりがいや達成感を味わうことができた。また、その後の他の場面での活動においても、RESASを活用して情報の収集や分析を行う生徒が多く見られ、RESASを使用したICT活用能力の高まりや、データサイエンス分野への関心の高まりを感じることができた。

3年生は、昨年度に「未咲輝学Ⅱ」の中でRESASを用いて立案した政策を元にビジネスプランを作成した。また、株式会社伊予銀行と協働して起業セミナーを開催して、起業や金融分野への理解を深めた。今後も、地域の特色を生かしたビジネスプランづくりや起業セミナー等を通して、地域の魅力を発見し、地域の新たな雇用の場として「ブーメラン人材」の地域へのUターンを促すとともに、地域経済を支えることのできる起業家の育成を目指して学校設定科目の研究に取り組んでいきたい。

## 6 校内体制

### (1) 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

校内の教育課程委員会において、各教科等における取組内容や、実施時間の原案を年度当初に作成した。その原案を基に、カリキュラム再編のための校内検討会を開き、実際の運用や実施状況についての情報共有を図った。また、コンソーシアムや運営指導委員会においても、実施状況等を報告し、適宜、指導・助言を受けた。

(2) 学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

本校がこれまでに築き上げてきた実施体制の下、地域協働課を中心として研究を行った。具体的には、「総合的な探究の時間」において、研究テーマごとに生徒を縦割りにした班を作り、複数名の担当教員を配置した。教員の役割としては、生徒の活動における助言や、外部人材との連絡、調整等が挙げられる。未咲輝学では、各学年団の教職員が年度当初に提示されたカリキュラムを基に、具体的活動内容を決定した。

地域協働課員は、各研究班に必要な外部人材の紹介、調整を行ったり、班ごとの連携を図ったりするなどして担当教員のサポートを行った。また、各探究活動における担当教員や代表生徒が定期的に進捗状況等を話し合う場を設定することで、各班がスムーズな情報交換を行い、それぞれ連携したり、サポートし合ったりしやすい環境作りを行った。さらに、カリキュラム開発等専門家から助言や提案、外部人材の紹介をしてもらうことにより、より深まりのある取組を行うことができた。

(3) 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

「総合的な探究の時間」においては、各研究班担当教職員が、未咲輝学においては、各学年団の教職員と地域協働課員が定期的に意見交換をし、進捗状況が分かるようにしている。成果の検証については、年度当初と年度末に生徒対象に実施したループリックの分析や、生徒のレポート、成果発表会などから総合的に判断した。年度末には、地域協働活動成果検証会を行い、本年度の成果の検証と次年度の改善点を話し合う機会とする。